

札幌新まちづくり計画市民会議  
文化・人づくり分科会第4回会議概要録

日 時 平成16年2月5日(木) 18:00~20:30

場 所 リンケージプラザ 2階 第1研修室

出席者 臼井 博 会長 ・大沼義彦 副会長  
阿部一司 委員 ・飯塚優子 委員 ・杉森洋子 委員  
高田悦子 委員(経済・雇用)

次 第

- 1 開 会
- 2 議 事
  - (1) 今後の分科会の進め方
  - (2) 事務局説明(資料「ビジョン編に向けての市の素案」ほか)
  - (3) 意見交換
- 3 閉 会

議事の概要

最初に、今後の議論の進め方について、臼井会長より確認がなされた。

続いて、事務局から資料1「ビジョン編構成イメージ」、及び資料2「ビジョン編に向けての市の素案」についての資料説明、また、都心部小学校の跡地利活用、市立高等専門学校・高等看護学院の大学化、学校と地域の連携についての説明が行われた。

その後、これらの資料などに基づき、活発な意見交換が行われた。

最後に、重点的な事柄のまとめを各委員がそれぞれ考えてくるよう臼井会長から提案がなされ、閉会となった。

## 意見交換の概要

### 小学校跡地利活用に関する資料について

- Q 「大通小学校跡地利活用説明会」資料の「5 これまで頂いた利活用方法の主な要望項目」の優先順位はどう決めるのか。(高田委員)
- A 全部の要望ができるわけではない。その地域を含めた活用検討会議で議論をしていく。(事務局)
- Q 「保育園」とあるが、大通小学校併設の幼稚園はこのまま存続するのか。(高田委員)
- A 円山小学校の仮移転のときはそのまま残る。最終的な本格活用の際のことは、そのときに検討する。ここに挙がっている「保育園」というのは、民間の保育園が入りたいという要望が出ているということ。(事務局)
- A 大通小学校は17年度末まで円山小学校の仮校舎として使い、その後の活用については、来年度にかけて市内部で検討し、それから地域に示し議論していくことになる。(事務局)
- Q 「5 これまで頂いた利活用方法の主な要望項目」は大通小学校に限ったの要望か。(高田委員)
- A 3校の廃校活用としてこれだけの要望が出ているということ。(事務局)
- Q 要望の中には学校を限定したものもあるのか。(臼井会長)
- A ある。(事務局)
- Q 幼保一元化は時間の問題と思う。そういう考え方で臨むのかと思って質問をした。(高田委員)
- A 現在、幼児教育に関する計画を策定している。幼保の連携、一元化についても計画の中で検討していきたいと考えている。(事務局)

### 資料2「ビジョン編に向けての市の素案」

#### 重点戦略課題「自立した市民に育てる教育の推進」について

- Q 重点戦略課題「自立した市民に育てる教育の推進」の「各主体の主な役割」について、初等中等教育はどこに位置づけられるのか。「思いやりとゆたかな心をはぐくむ環境づくり」という施策からも学校をきちんと位置づけることが必要。(大沼副会長)
- A 行政の中に学校が含まれる。(事務局)
- ・ それならなおさら、はっきり記載した方がいい。平成15年度から導入された学校評議員制度や学校評価制度は学校を主体として浮かび上がらせる仕組み。その反面、行政一般に含まれるというのでは整合性がない。(大沼副会長)
  - ・ 学校評議員制度にどういうメンバーが入るのかによって、学校の主体性がなくなったり、その逆になったりするので、選び方は非常に難しい。(高田委員)
  - ・ 「戦略目標」に「学校、家庭、地域社会」とあるが「企業社会」を入れてもらわなければいけない。(高田委員)

#### 行政の位置づけについて

- ・ 「各主体の主な役割」にある「行政」の位置づけは、重点戦略課題ごとに違うのではないか。「芸術・文化の薫る街の実現」ではサポート役だが「自立した市民に育てる教育の推進」ではサポートだけでは済まず、まさに主体である。それが分かる表記もあった

方がいい。(飯塚委員)

- ・日本の場合は、スポーツを学校の運動部活動側からカバーしており、社会体育に小・中・高校は入ってこない。行政もその限りでしか動けないことから、学校ということがどこでも論じられなくなると思う。(大沼副会長)

#### 成果指標について

- ・スポーツの定義があいまいなので「週に1回以上スポーツをする人の割合」という成果指標のとり方は問題がある。それより、運動施設に行く人を増やすというような具体的な実数を指標とした方がいい。(大沼副会長)

Q 「学習成果を活用したい人の割合(成人)」は能力開発ということか。(高田委員)

A それだけではなく、趣味的なものも入っている。(事務局)

- ・「学習」という言葉の意味は広いが、趣味が仕事につながるということもある。(臼井会長)
- ・不登校とは年に30日以上欠席ということだが、子どもの実態、欠席の原因はさまざままで一律にとらえることは難しいかもしれない。我々から、新たな指標を出してもいいかもしれない。(臼井会長)

#### 市立大学、教育について

##### 阿部委員

- ・「(仮称)札幌市立大学基本構想」に「札幌市立大学が担う使命」があるが、技術の修得だけでこれが達成されると考えているのであれば既存の大学とどこが違うのかと感じた。
  - ・現代文明が行き詰まりを見せている今、人間中心ではない先住民の知恵が必要とされている。
  - ・札幌市立大学基本構想に「環境との共生」「すべての人にやさしい」という言葉があるが、現在、そういう教育がなされているだろうか。そういうことを考えることも必要。
- Q 市立大学の教養、基礎教育のカリキュラムに先住民族の知恵というものが反映される余地はあるのか。(臼井会長)
- A 現在、大学設置準備委員会で学科、カリキュラムについて検討している。委員のお話については、その需要とカリキュラム全体構成の中での位置づけについて検討していきたい。(事務局)
- ・アイヌ紋様などをデザイン学科で取り上げるということも考えられる。(高田委員)
  - ・日本の文化の根本には縄文文化があるが、それを今の日本人は忘れていて、その文化は沖縄とアイヌに残っているが、それを取り戻さなければ私たちの未来はない。(阿部委員)

#### 子育て、教育について

- Q これからは家庭を大事にしなければならぬと考える。そういった企業も出てきたが、それに対する助成、支援を考えられないか。(高田委員)

A 経済的な支援は難しいかもしれないが、市でその企業の取り組みを広報するというこ  
も考えられる。(臼井会長)

- ・ 子どもの問題解決のためにも、生きる力というものを大切にしていかななくては  
いけない。その中には自己決定権、死を考えるとということも含まれる。(高田委員)
- ・ 生きる力を育てていくためには、企業社会も含めて、大人が子育てを一所懸命やる  
ことが必要。(高田委員)
- ・ 一生の生き方という面から死を考えるとという文化、教育がもっとあってもいい。  
生きる力と死を考えるとことは相反するものではない。(臼井会長)
- ・ 「国際性」の視点というと観光産業となりがちだが、世界各国の文化を通じて「  
生きる哲学」を学ぶという方向も考えられる。(飯塚委員)
- ・ 部活動、スポーツには親とは違う教育を受けさせるという面がある。それなのに、  
教育者が学校の成績が下がったら部活をやめてもらうなどと言うのは問題。(阿部委員)
- ・ 年長者、経験者が、どう子どもの相談に乗れるかということも大事。具体的な対応の  
仕方についても考えなければいけない。(阿部委員)

#### 高田委員

- ・ 学校の教師には子どもの微妙な心のひだを感じられる感性がなければならない。
- ・ 学校の評価制度は、学校がそれに飲み込まれてしまわないよう慎重に活用しなければ  
ならない。
- ・ 自然との共生によって郷土愛が生まれ、また、それによって、優しさが生まれ、芸術・  
文化の振興にもつながっていく。

#### スポーツについて

- ・ ワールドカップ時、実は観光客数は減ったが、外国との交流機会増など、文化面での  
収穫はあった。文化面では指標をとれないこともあるので、アカウントビリティ(市民  
に情報を開示し、納得できるように十分説明する義務と責任)については考えていかな  
ければいけない。(大沼副会長)
- ・ 全国的にスキー離れが進んでおり、冬の観光も減っている。(大沼副会長)
- ・ 立派な施設をつくり、冬のスポーツがお金がかかるものになってしまったことも衰退の  
原因。(飯塚委員)
- ・ 大通公園に無料のスケートリンクをつくるなど、まちなかに仕掛けをつくってほしい。  
(杉森・臼井・大沼委員)
- ・ 冬のスポーツというと、スキー、スケートと考えがちだが、いろいろな体の動かし方、  
自然とのかかわり方として、教育の中で工夫をもっと考えるべき。(臼井会長)
- ・ スポーツを嫌がるというのは、学校体育でのスポーツの実践の仕方が間違っている、  
生徒にとってつまらないものになってしまっていることも原因。(大沼副会長)
- ・ スケートボードをやっている人たちが排除されてしまうなど、芸術活動とかスポーツの  
先駆者は排除されてしまいがちである。(大沼副会長)

- ・ 学校体育で一つのスポーツが必修ではなくなることが、家庭の、そのスポーツの習得熱を下げるということもある。経済状況も含め、悪循環になっている。（臼井会長）

## 芸術・文化について

- ・ 週休2日制導入などで、スポーツ、文化・芸術鑑賞が減っているのではないか。（高田委員）
- ・ 現在、新年度予算で、小学校6年生全員を札幌の演奏を聞きにキタラに連れていくことを計画している。予算額は3,000万円強である。子どもの中から生の演奏を聞かせることで、担い手育成につなげることを考えている。（事務局）

Q プログラムは子ども用に特別につくるのか。（臼井会長）

A オールドソックスな曲を聞かせ、指揮者の解説等を含めて理解してもらおうという形を考えている。（事務局）

Q 札幌の中学校の合唱コンクールが盛んだが、かなりいい線にいつているのではないか。（高田委員）

A 全国的レベルに達する学校がいくつかあると聞いている。また、その他の市民レベルでもレベルが高いと聞いている。（事務局）

- ・ 文化には反社会的な部分を持ちながら発展していくという部分がある。囲い込み過ぎるとアートは死ぬ。（飯塚委員）
- ・ 15、6年かかって大道芸を評価する観客が育ったということがある。文化は育てなければならない。（飯塚委員）
- ・ 文化には反社会的ということだけではなく、さっぽろ産業振興財団などで誘致するように、いろいろな面から取り組むことも大切。（高田委員）

## 札幌の特色を生かす

- ・ 赤レンガ庁舎が札幌市のものであったら、もっとすごい活用の仕方があるのにと残念に思う。（高田委員）
- ・ スポーツで札幌らしい施設というと5基のジャンプ場がある。昨年、大倉山ジャンプ台を使ってチューブソリすべりなどのイベントを行ったのだが、結構人が集まったということもある。体育・文化施設をまず使ってみるといふ発想もいいのではないか。（事務局）
- ・ 冬のイベントを区や小学校単位で行い、家族ぐるみで外に出させるようなことを考えた方がいい。（阿部委員）
- ・ 札幌のいいところ、札幌らしさ、札幌ならではのスポーツ環境を知ってもらふ努力をする必要がある。（事務局）

Q 「アイヌ文化のゆたかな知恵と伝統の継承支援と市民理解の促進」はどういう形で実践していったらいいのだろうか。（高田委員）

A 札幌市アイヌ文化交流センターに、まず札幌市内の小学校の子どもたちに1年に1回は来てもらいたい。（阿部委員）

- ・ アイヌや世界の先住民族には、自然との共生、循環の思想がある。アイヌ文化振興法は、そういった思想が日本の文化にとって必要だという認識でつくられた。そういう意味で、ぜひ活用すべきである。ただ、札幌にはアイヌ文化条例がない。（阿部委員）
- ・ アイヌ文化の伝承について、札幌に道内各地から来てもらって、北海道と札幌市共同で、お祭りみたいにやってもいいかもしれない。（高田委員）
- ・ もう物を建てるような時代ではない。その中でソフトとして残された大事なものがアイヌ文化である。（高田委員）
- ・ 学校の教育活動の一つとして、博物館、美術館に連れていくということも必要ではないか。（臼井会長）
- ・ 札幌には、道内各地で行われていることをコーディネートする、それらについての情報を提供するという役割もある。（飯塚委員）
- ・ 文化、言葉は実践がなければ消滅していく。残すためには、日々の実践が欠かせない。（臼井会長）
- ・ 自分たちだけでやっているとしぼんでしまうから、オープンにするということが必要である。そういう意味でイベントとして形づけることも大事。それはさっぽろ産業振興財団の役割かもしれない。（高田委員）

#### 今後の進め方について

- ・ 次回はもう少し突っ込んだ議論をしていきたい。事前に各自に重点的に考えてきてほしいことを割り振るのでまとめてきてほしい。（臼井会長）
- ・ 市民会議で出された問題点を市の他の会議でもきちんと取り入れてほしい。（高田委員）